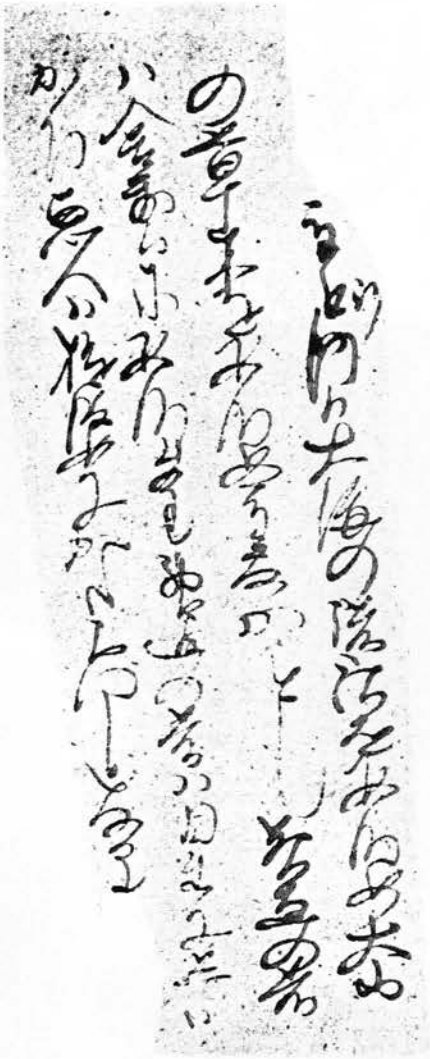
今月の御聖訓



たとえば大海の諸河をあつめ、大山の草木をあつめたるがごとし。智恵の者は舎利弗にあつまり、神通の者は目連にしたがひ、悪人は提婆にかたらいしなり。

【法華経題目抄　全集九四五頁】

目　　次

今月の御聖訓

折伏は真の慈悲の表れなり……菅野憲道　1

読書案内『いのちの大河』……松田銘道　8

続・日興上人御本尊調査記録〔四〕……山上弘道　9

ちょっと寄り道　〈ウィンドウの波（後）〉……森田観道　11

「弟子分帳」と十七回忌〔十七〕……松田銘道　12

天地つかの間〔その　〕……成田詳道　17

……18

【法華講入講式挨拶】よき檀那をめざして……岩本敏夫　19

五月の行事　今月の宅お講

表紙写真撮影:松井義信氏　題字:立正安国論より拝写

お講講話（要旨）

拝読御書「法華初心成仏抄」（全集五五〇頁）

折伏は真の慈悲の表れなり

菅野憲道

《よき師・よき法・よき檀那》

今月は「法華初心成仏抄」を拝読して宗祖の慈悲についてお話します。この御書には仏法の祈りの成就する条件として、よき師・よき法・よき檀那の三つが必要であることを、火打ちと石とほくちの三つで火を起こす譬えをもって説かれていることで有名な御書であります。

そして、これらの三つをそれぞれ具体的に申しますと、まず第一によき師の指標として、

「よき師とは、指したる世間の失無くして、聊のへつらうことなく、少欲知足にして慈悲有らん僧の、経文に任せて法華経を読み持て人をも勧めて持たせん僧をば、仏は一切の僧の中に吉第一の法師なりと讃められたり。」（全集五五〇頁）

火打ちの古絵図

と仰せの如く、末法において法華経を弘める真実の僧とは世法上も人の模範であり、慈悲深く、物欲や名誉欲もなく、しかも人に対して遍頗（へんぱ）な心がなく、如何なる人にも必ず法華経の正法を説き弘める僧こそが末法における真の法師であると申されております。

このことは、日蓮大聖人の生涯を拝しますと、よき師たるものがどのようなものか、身をもって示されていることがわかります。

しかも、法華経の本門によれば、釈尊が、滅後末法の一切衆生の済度を願われて、上行菩薩を上首とする地涌の菩薩を召し出して、法華本門の妙法蓮華経の正法を付嘱され、末法弘通を託されたと説かれております。宗祖は上行菩薩の再誕として末法の日本に出現して法華弘通の生涯を送られ、御一代の間に法華経の文々句々を身をもって実証されたのですから、少なくとも法華経に帰依する以上は、末法の今日においては、必ず日蓮

大聖人を一切衆生の導師、「よき師」として仰いで、法華経による成仏を期すべきなのであります。

第二のよき法とは、

「吉法とは、此の法華経を最為第一の法と説かれたり。已説の経の中にも、今説の経の中にも、当説の経の中にも、此の経第一と見えて候へば吉法なり。」（同五五一頁）

とありますように、法華経のことであります。我われが仏法によって成仏を期するなら、第一に考えなければならないのは、最勝の正法を選ぶということでなくてはなりません。釈尊にはいろいろなお経がありますが、その中で最も勝れた経典が法華経であり、さらに滅後末法においては、大聖人が説かれた法華本門の妙法蓮華経を根本とし、この法門によって出処進退を決しなければなりません。

第三に、よき檀那とは、

「吉檀那とは、貴人にもよらず賤人をもにくまず、上にもよらず下をもいやしまず、一切人をば用ひずして、一切経の中に法華経を持たん人をば、一切の人の中に吉人なりと仏は説給へり。」（同）

と仰せのごとく、世間の権威や権力を頼りにしたり、外見や好き嫌いによって判断したりすることなく、公正な態度で、一切人の言葉に惑わされずに、法華経に問い、法華経に生きる人こそよき檀那であると、大聖人様は仰せなのであります。涅槃経にも釈尊の遺言として「依法不依人」ということが説かれておりますが、この精神こそは仏教徒の根本信念でなくてはならないのです。

このように「よき師・よき法・よき檀那」といって、現代における法華経信仰は、日蓮大聖人と法華経と、依法不依人の信念をもった信者の三つが一致した時に、はじめてその祈りが叶うと仰せられているのです。

しかし、たったこれだけのことですら、後世になるといろいろ異義を生じ、迷いをきたすのであります。現に宗門や学会においても、師の位置に「日顕上人」とか、「池田先生」を日蓮大聖人の座にすりかえて、大勢の僧俗は、このセンセイのいうことを聞かなければ謗法だなどと信じ込んでしまうのですから恐ろしいことです。

末法において日蓮大聖人に肩を並べたり、それを越えるような者があるはずはありませんが、彼らの弟子や会員は、すっかりこの「上人」や「センセイ」に信伏随順するよう徹底指導され、白いモノも黒と教えられれば、黒と信ずるまでに教育されているのです。これは「謂己均仏（いこきんぶつ）」の増上慢以外の何ものでもありません。

お経の中に「在々諸仏土　常与師俱生」等と説かれると、これを利用し、「先生」は特別尊いお方で、我われは過去世からの縁があって、いつの時代でもその師匠のもとに生まれてくるのだというように、それをうまく取り違えて、先生を絶対化し、信者大衆に君臨する。また「代々の上人悉く日蓮なり」等という相伝の切り文を利用して、法主を大聖人と同格のように洗脳しているのが今の宗門の実状です。

今世における師弟関係は一往のことであって、仏法の因果からいけば三世にわたる本師とは、法華経の本仏以外におられな

いのであります。

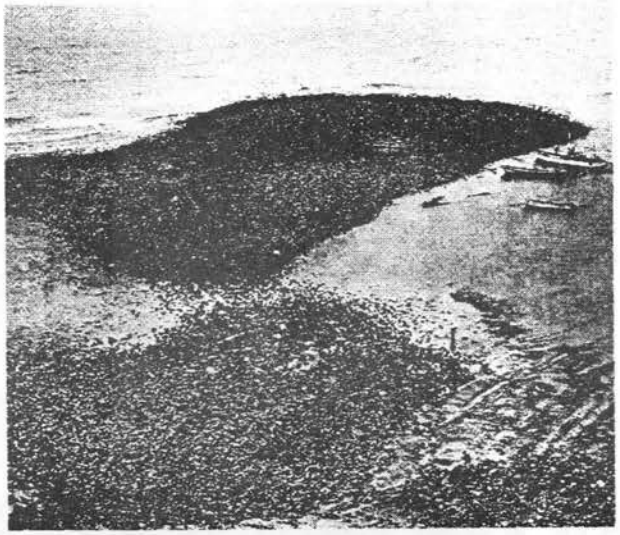
しかも、彼らの姿は、強者とか上位のモノには弱く、弱者や下位のものには強い。諂(へつ)いの心も強く、世間的な過失やスキャンダルも多く、小欲知足ならぬ強欲不知足で慈悲も無い。組織の宣伝で聖人君主の仮面をかぶって、立派そうに宣伝しておりますが、その本当の姿は経文・御書の姿とはまったく違って、権力の亡者となって普通人より質が悪いのであります。

《慈悲とは厳愛なり》

ここで、慈悲ということをお話したいのですが、我々が慈悲といいますと、大抵は、いかにも優しそうな穏やかな雰囲気を思い浮かべます。

鎌倉時代には、大聖人に敵対した良観房という人がおりました。今でいえばボランティア活動の元祖のような人といえばいいでしょうか、大変慈善事業に熱心な高僧がおりました。

その良観房が、大聖人の法門に敵対して、いろんな謀略をこらして大聖人を幕府に訴えて流罪や死罪に陥れたのであります。表面上はいかにも聖人のような顔をしてとりすましており、弱者救済にあたる姿を、世間は良観房の慈悲の姿と勘違いをし、一方、仏法の正邪を厳しくたてわけ、一切衆生に厳愛の二義をもって人に接する大聖人には、強い反発が起こったのであります。誰でも厳しい人よりは優しい人を好む性向がありますから、他宗を厳しく破折する大聖人が敬遠されるのは当然かもしれません。



忍性が津料を徴収していた和賀江島

しかし、大聖人が本当に優しい方であられた事は、いろんな御書を通してみればよく分かる事でありまして、例えば、「上野殿母尼御前御返事」や「五人土籠御書」等には、日蓮大聖人が、いかに人間に深い情愛を持っておられたかということが、よく表れているので、つくづく考えさせられるのであります。

むしろ、親鸞の書いたものなどを見ると、当時飢饉などで都の人が大勢餓死する知らせを聞いて、「人が死ぬのはあたりまえだ」などとそっけなく手紙に書きのこしていますし、「一定地獄はすみかにて候」などと開き直って、いかにも冷酷な感じがするのであります。

大聖人は「立正安国論」に記されるとおり、鎌倉で大飢饉や地震が起きた時、人々の悲惨な光景に心を痛められて「どこかいまの世の中が間違っているのではないか」というところから、法華経にたどりつかれたのであります。社会や人間の不幸な姿を見ても、反応の仕方が念仏の親鸞などとはまったく違って、「この悲劇を何とかしなくては」という熱い人間愛のある方だったのでしょう。

そういう方に、何故厳しい、あるいは強い批判精神が備わっているのか、世間の人には理解できない部分のようであります。

慈悲ということは、慈と悲の二字に分けられ、これを別の言葉に置き換えますと、厳・愛という事になるのでありますが、この厳しさと愛情の両方が備わっているのが本当の慈悲なのであります。

親が子どもを本当に可愛いと思えば、優しいだけではすみません。ただ子どもの欲するところ、求めるところに応えるばかりでは、本当の愛とはならないのです。自分の子どもを立派に育てようと思えば、子どもが嫌がっても、やはり親として厳しく人の道や、物の道理を教えてやらなければなりません。

もし、子供が盗みをしたりすれば、心を鬼にして厳しく叱らなければならないのであります。そうでないと悪心の種が大きく育って、ついには、親子ともども苦果を招くことになります。慈悲とは、優しさと厳しさを兼ね備えたものなのであります。

冷酷な面もある親鸞

《二乗根性は成仏の妨げ》

次に、同御書に、

「三界の生を離れたる二乗と云ふ者をば仏のの給はく、設ひ犬野干の心をば発すとも二乗の心をもつべからず、五逆十悪を作て地獄には堕つとも二乗の心をばもつべからず、なんどと禁められしぞかし。」（全集五五二頁）

とあります。これは犬畜生のような心を起こしても、二乗の心を持ってはいけない、地獄に堕ちても二乗になってはいけないと、厳しく二乗に陥ることを誡められたものですが、そのわけは二乗の心は自他の成仏の妨げとなるからです。

よく「二乗根性」といいますが、二乗は自分の小さな悟りを絶対化して安住してしまう。自己のわずかな救いだけで満足しているのですから、本当のところは利己主義者なのです。自己を磨いてさらに深い真実を求めようという心もなく、また他人との関わりを拒否する。これは、自分というものが大勢の人との関わりにおいてのみ存在する、全体的な存在であるということが分かっていないのです。仏様というのは、みな一切衆生の命と同じなんだ、仏様の自我というのは我という意味ではなく、共同の自我であるということを自覚されているのです。

「時に我及び衆僧」などと表現されるときは、一切の衆生を含んだ時の我、という意味になっているのです。ところが、二乗といわれる人々は、自己がまったく他人から孤立した存在であるととらえ、己れの仮の姿をもってすべてであると思い込んでいるところに、非常に大きな間違いがあるのであります。

本来、仏法の理想とするところは、利己的な命を克服して、少しでも我見をうち破って、広く世の中のため、一切衆生のため、自分の六親眷族のために自我を押し広げていって、法界と

一体となった本当の自己を確立することにあるのです。それを、宗祖は「妙法蓮華経との境智冥合」「十界互具」「師弟相対」という法門をもって示されたのであり、この大願を起こすところに、仏法者の精神があると思うのであります。

そうしてみると、折伏ということも、本当は慈悲行に裏づけられた姿である、ということになってくるのであります。

《慈悲・平等・忍耐――衣座室の三軌》

冒頭の御文に「慈悲有らん僧の」と書かれていましたが、慈悲とは、結局のところ厳愛、厳しさと優しさの両方を兼ね備えていて発揮されるものです。

法華経法師品には、衣座室の三軌（仏の室、仏の衣、仏の座）という三つの基準が説かれています。それは、慈悲心室・忍辱衣・法界空座という事なのですが、法界空に居しとは、一切の執著を離れて公正平等に見るということです。もっと世間的に分かりやすくいえば、物事を大局的に見るという事です。自他のとらわれなく、時間的にも空間的にも全体観の上に立って行動することです。自分個人から、家庭や社会、国家、さらに広げて人類の未来の行く末までをも、視野に収めていってこそ、その人はしっかりした見識の持ち主だという事になってきます。

勿論時間的にも長期的視野に立って物事を判断する智慧が大切です。今さえよければ後はどうなっても良いというような愚かな考えは捨てなくてはなりません。仏は法界全体をご自身のこととして捉えられているのですから、いかなることも他人事として無視することはありません。

そう考えていきますと、真の慈悲ということは自分一個の考えや、好悪の感情から起こるはずもないのでありまして、もし我われが真の慈悲を持つことができるとすれば、それは仏の心に我が心が一体となったとき以外はないのであります。

もう一つ大切なことは忍耐心ということでありまして、正しいことをやっていこうとすればいろんな障害があったり、迫害を受けることがあるでしょうが、正しい信念信仰を継続していくには必ず忍耐心が必要になってくるのであります。善意を踏みにじられたり、恩を怨で返されたりすることは、エゴという煩悩を抱えた衆生世間では当然の事でありますから、真の慈悲は必ず強靱な忍耐心を必要とするのであります。即ち真の慈悲は、必ずこの平等観と忍辱心を同時に備えているのであります。

そして、そういう姿は日蓮大聖人のご一代の中に、よく示されていると思います。例えば、先ほどの自我偈の中には、

「毎自作是念　以何令衆生　得入無上道　速成就仏身」

とあって、いつでも衆生を成仏せしめるように仏は祈っていると説かれています。同じように大聖人の御書の中にも、例えば「諫暁八幡抄」の中には、

「日蓮は去ぬる建長五年〈癸丑〉四月二十八日より、今年弘安三年〈太歳庚辰〉十二月にいたるまで二十八年が間、又他事なし。只妙法蓮華経の七字五字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり。此れ即母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり。」（全集五八五頁）

と仰せになっています。この「日蓮の生涯は欲も打算もない、ただ何としても、すべての人々にこの仏法を知らしめたいと願

うばかりだ」という熱い思いが、どうして人々には伝わらないのでしょうか。日蓮というものは、立宗宣言からずっと弘安の晩年に至るまで、ただ南無妙法蓮華経の題目を一切衆生の口に入れようと励み続けているのである、それ以外なにも望むものはない。自分の赤ちゃんに何とかしてお乳を口に含ませようとする母親の心と同じことだというのです。このことによっても、寿量品の経文の心と、日蓮大聖人のお心とはまったく同じだということが分かるのであります。あるいはまた、「報恩抄」の、

「日蓮が慈悲広大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。」（全集三二九頁）

という御文。さらに「開目抄」にも、

「日蓮が、法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はをそれをもいだきぬべし。」（全集二〇二頁）

と、いわれています。

この日蓮大聖人の慈悲が一分でも分かれば、折伏の精神も分かるのであります。折伏は、相手を批判攻撃するのでもなければ、会員勧誘の運動でもありません。真実の仏法を何とか衆生に知らしめようという慈悲の一念から起こるのであります。衆生を正法正義に導くため、「正は正、邪は邪」として、正法を顕揚するためであります。また「但惜無上道」といって唯一無上の成仏の直道を乱さないための護法の精神からおこるのであります。

日興門流ではこれを「師厳道尊」といって、大聖人・日興上人いずれも法義の上においては少しもゆるがせにせず、厳格であられました。時に親子師弟の恩愛に反し、時に教団分裂の危機にさらされても、厳格に法華本門の法義を貫いてこられた。自らの身命に代えても守らなければならない大切な一切衆生の成仏の法門でありますから、自ずと法門の上には厳しいものがあります。今のように法門の上においてはいい加減で、自分や教団を守るためには厳しいという高僧や幹部とワケが違います。自分には甘く、弟子や他人には厳しいというのではまったく本末転倒です。現代にまで大聖人の仏法が令法久住していることは、宗開両祖の行体・行儀によって伝わっているといっても過言ではありません。「師厳にして道尊し」なのであります。それをろくに修行も学問もない今の僧侶や在家が自分の徳のように宣伝することは大聖人の徳を奪うものであります。

《折伏の根本精神は真の慈悲心》

創価学会の行き過ぎた会員勧誘運動と、この二・三十年の宗門・創価学会の混乱によって、いまや「折伏」という言葉はすっかり誤解されております。そうした世間の誤解に我われまで振り回されてしまわないようにしなくてはなりません。思うにどれほどの人が正しい信仰や定見を持って行動しているでしょうか。世間の人々は付和雷同、場当たり的に大勢に流されて、根無し草のような皮相的な人生観しかもっていないのが実状でしょう。我々が朝晩唱えます寿量品に「没在於苦海」とありますが、実際、迷いと苦しみの海に浮き沈みをくり返しているような人生です。せっかく縁あってこの法華経に帰依した我われが、世間の無責任な評判にながされて、大聖人の仏法を見失う

ような事があれば、宝石を瓦礫と替えるようなものであります。

何としても、世間の人々に大聖人の法華経の心を弘めていって、たとえその時々においては人々の反発があろうとも、下種結縁ということを考えて、真の折伏の心を身に体して、正直に正法を弘通していかなければならないと思うのであります。

いずれにしましても大聖人様のお振る舞いが、すべて「一切衆生を何としても成仏せしめたい」「どうにかして三大秘法の仏法を知らしめたい」という大慈大悲からであることを、皆様方には心肝に染めて学びとっていただきたいと思うのであります。

大聖人様のお姿は慈悲心以外のなにものでもない、慈悲の塊であるということです。その上に、もし宗祖の慈悲のお心が一部でも分かれば、心から報恩謝徳のお題目を唱えることができるのであります。心から素直に法華経・日蓮大聖人を信ずることができ、真の法悦を感ずるのであります。

大聖人の折伏には慈悲が裏付けられている

「開目抄」の終わりに、結語を表される段に、

「我が父母を人の殺さんに、父母につげざるべしや。悪子の酔狂して父母を殺すを、せいせざるべしや。悪人、寺塔に火を放たんに、せいせざるべしや。一子の重病を炙せざるべしや。」（全集二三七頁）

と、この日蓮大聖人のやむにやまれぬ思い、日蓮大聖人の血を吐くような叫びが分からずして、どうして大聖人の弟子檀那と言い得るでしょうか。

日蓮大聖人は正しい宗教を見失って苦海に浮き沈みしている衆生を見た時に、どれだけ憎まれても、どんなに迫害されても、ただ正直に法華経を一切衆生に勧めていく以外にないと覚悟されたのです。「法華折伏　破権門理」の仏勅をそのまま身命にかえて実行されたということです。

現代においても、なお無宗教が大勢をしめ、たまたま宗教心を起こせば営利宗教やインチキ宗教に引っかかる。ミイラのような形骸化した仏教でお茶を濁して、多くの衆生が道に迷って徒らに一生を空しく送る状況になお変わりはありません。何としても、我われだけでも宗祖の真の折伏精神を受け継いで頑張っていきたいものであります。

大聖人の仏法が折伏で成り立っているということを、皆さん方も重々ご承知でありましょうが、折伏の根本精神が一切衆生を救うという仏様の慈悲に裏づけられたものであることをよくよくご承知の上、ご精進をお願いしたいと思うのであります。

南無妙法蓮華経　（了）

若い人たちの自死、それも現在では小学生という低学年にまで広がりを見せてきたその現象への対応は、抜本的な解決策を見出すことができないまま、社会の重い宿題となって今もなお広がり続けている。

『いのちの大河』の著者は、愛すべきった一人の息子をやはり自死によって失ってしまった父親の一人である。著者は自死した中一の息子が書き残していた詩を夫婦の手でまとめた。その『ぼくは十二歳』はベストセラーにもなるほど多くの人たちにさまざまな問題と反響を与えたが、それより二十年以上の歳月が流れた現在でも、

「ざんきの思いを貫きたい。それさえできず死んだ子にみつめられ続けているのです」（朝日新聞H八・九・十七）

との思いを今なお懐き続けている父親である。

長い歳月をかけて子どもの死をみつめ続けた著者であっても、それでもはやり自分の子どもの死を受け入れることは重い課題でもあるようだ。

「悩んでいたとしても人間の死はそれほど簡単に割り切れない」（同）

との言葉にそのことが言い尽くされている。

読書案内

松田銘道

『いのちの大河』

高史明著

ちくま文庫

四六〇円

その重い課題を抱えていた父親が、息子が自死にいたった原因は何だったのかを、O・Mさんへの手紙という形で、若人たちへいのちの重さ、尊さ、そしてそのいのちが何に支えられているのかをせっせっと綴った、それが『いのちの大河』である。

ここに収められた手紙は『ぼくは十二歳』の出版が機縁となって届くようになった若い人たちへの返書である。二十の返信がそこに収められているが、その一つひとつは「どうか生きつづけて欲しいという願いをこめて書いた」ものばかりだ。

また宛名のO・Mさんとは「私にお手紙を下さったすべての人を意味する」多くの人たちである。それだけに著者は「若い人たちと共に、生を考える場の一つになればと思う」との想いを傾けて綴った。その想いは「第一信 人間は二度誕生する」「第三信 自然の側からものを見る」「第十三信 チェにはらまれる矛盾」「第十四信 道は一人一人のいのちの中にある」「第二十信 いのちの大河の中にある個のいのち」といった題名そのものにまでも込められている。いのちの大切さを読者に伝える手紙がぎっしりつまった書だ。（正覚院主管）

続・日興上人御本尊調査記録〔四〕

山上弘道

〈平成九年三月二十八日
山梨県昭和町押越正法寺・
韮崎市本照寺調査〉

正法寺・本照寺は、『日興上人御本尊集』『日興上人全集』の編纂を発願し、その為の調査の第一回目を飾った思い出の寺院である。思えばあの時の調査の成果がはずみとなってまがりなりにも発刊に漕ぎ着けられたといっても言い過ぎではない。あの時門前払いをくっていたらと思うとゾットするし、それ故に両寺に対する感謝の気持ちもひとしおである。今回は、前回撮らしていただいた写真が天地同寸でないなど（カメラワークだけの問題ではなく奉掲できなかったなどの諸事情にもよる）、写りがもう一つなので、機材も整った今もう一度撮らせていただくことにしたのである。

平成九年三月二十八日、朝五時朝霞を出発。八時甲陽寺に到着。正法寺に確認の電話をし、九時半芳賀師の先導で正法寺に向う。十時山門をくぐり玄関を叩いた。客間に案内されお茶を戴いていると、程なく住職が御本尊等重宝を持ってみえられた。前回の調査の御礼を申し上げ早速撮影に入った。前回は表装に出す直前だったが、そのすべてが見事に表装されていた。表装の際の不手際も全く見られない。

先ず日興上人御本尊から奉掲し、寸法を改めて計り直す。縦が六二・一cmと前回より〇・一cm短いがこの程度は計る位置などによる誤差であるから問題はない。寸法を測っている間にカメラの用意である。カメラはあくまで御本尊に対して正確に相対していなければならない。そして御本尊の中心を計りそこにカメラの位置を持っていく。この基礎作業が疎かだと歪みがでたり天地同寸でなかったりするのである。ファインダーを覗く。照準を合わせる。ピタリと合ったところで、どうも御本尊の真ん中辺に横に一本、線のようなものがある。確認してもらうと継ぎ目のようだ。前回は一紙御本尊と思いそう記録してしまったが間違いであった。不慣れの上あせりながらの作業であったから仕方がない。二年経ってそういうことがイトも簡単に分かるくらいに成長したことを喜ぼう。

その他の日蓮大聖人御真筆断簡や、日興上人筆と思われる断簡なども撮影させて頂いた。撮影が終り片付けをしていると、近くの寿司屋で昼食をといわれ、せっかくですが本照寺さんが一時ですから失礼しますと再三辞退したのだが、もう注文してしまったし時間はとらせないからといわれ、結局ご馳走になった。申し訳ないことである。

とはいえ寿司屋を出たのが十二時二十分。大急ぎで本照寺に向った。五分前本照寺に着いたときには本照寺さんはもう正装され本堂に向われる所であった。法要がおわり二年前と同じ場所で撮影することになった。早速準備を始めると本照寺さんは御本尊奉

掲台がことのほか興味深かったようで、まじまじと見つめながら、考えましたなーと言って下さった。

先ずは永仁七年三月日の御本尊から奉掲する。首尾良く撮影完了。次に嘉暦四年二月二十日時正第一の御本尊。照準を合わせていると何やら後ろが騒がしい。撮影を中断しそちらに耳を傾けると、どうやら法華師が御本尊の裏に日興上人の御筆を見つけたようなのである。裏といっても表装した

韮崎市本照寺の本堂

裏ではなく表装される前に本体の裏に記されたものである。従って表面上には見ることができない。光を当てて透かして初めて見えるのである。以前源立寺さんに、調査の基本作業として必ず透かしてみるようにと言われていたのだが、それがどういうことであるのかが、この時実践的に理解された。文字は下方やや左側、丁度「南無伝教大師」の左横の位置に見える。御本尊の表面に光を当てるのは若干躊躇されたが、本照寺さんの許可を得て光を当て裏から拝見する。こうすると字は逆さまでなく本来の形になるのである。確かに日興上人の御文字である。読みにくいが「南條兵衛七郎女子石河新兵衛入道後家尼」までは確かに読みとれ、行が変わって「伝教大師」の字にかかって読みづらいが「□与之」と判読できた。□は「授」か「申」としか考えづらく、日興上人の御筆である以上「授」の可能性が強いが、今のところ□にしておこうということになった。将来何らかの方法で（X線写真とか、表装を剥がすとか）解読できる時を待ちたい。

それにしても日興上人は何のために裏に表と同じ授与書をされたのだろうか。書写された御本尊を折り畳んだ時、授与者名が解るように畳んだ表面（つまり裏側）に記されたものか。今のところこれといった名案は浮かばない。今後の課題である。これとおなじようなケースが複数確認されれば、何かが解るであろう。

この発見からさらに表の授与書をよく見れば、前回「南条」と読んだのは「南條」であることがわかり、前回「□□」「□」だったものが、それぞれ「女子」「後家尼」と判読することができた。

調査は一回ではいけない。チャンスがあれば二度でも三度でも、できる限り行うべきであることを思い知らされた。

なお、当寺では日蓮大聖人筆として所蔵されている断簡が、写真で法華師が推測していたように、日興上人筆であることが確認されたことも大きな収穫である。要文集のようであり、『日興上人全集』に掲載されている「諸宗要文」的なものではないかと思われる。

撮影もどうにか終った。今回は白黒も撮った。将来保存にあたっては白黒の方が勝れているかもしれないからである。御礼を申し上げ、来月十三日の北山本門寺の御虫払いに行かせていただくことを申し上げて本照寺を辞した。

ちょっと寄り道 ㉒

ウインドウの波（後）

伯耆の里　もりたかんどう

ニワトリの卵から雛が出てくるときのようすを、私たちはよく知らない。が、きちんとした手順があるという。昔の人はそれを「啐啄（そったく）」と呼んだ。卵からでることができるまでに育った雛は、殻を中からつついて合図をする（啐）。その合図で親鶏が殻の外からつついて殻を破る手伝いをする（啄）。この中と外との息のあった共同作業で、か弱い雛が殻を破ることができるという。絶妙のタイミングという意味で使われる。

ウィンドウの波は、「啐啄」そのものといえる。その変わり目は、WINDOWSが3・1にバージョンアップしたのと軌を一にする。需要と供給の一致は、単にユーザーとメーカーだけでなく、ソフトとハードの間でも見られた。

マイクロソフトが提示したWINDOWS3・1は、それまでの3・0と比べると、格段にすぐれた安定した機能を用意してくれた。視覚的な操作、共通のメニュー操作、複数のソフトの同時使用、どこのメーカーのパソコンでも動く柔軟性など、それをキーワードでいえば「共通」である。ただし、その機能を十分に発揮するには、高性能のパソコンが要求された。高性能のパソコンとは、高速かつ大量の処理ができるもので、それは高価と相場が決まっている。

ところが、いままで高嶺の花だった高性能パソコンが思いがけないことから値崩れしだした。日本語処理をソフト的にできる方法が開発されたとたん、海外のパソコン（これをDOS（ドス）／V（ブイ）機という）がいっせいに日本の市場に入ってきた。連動して、国内パソコンの価格が信じられない勢いで下がっていった。WINDOWSという雛が外へ出たいと合図すると、待っていたかのように低価格の高性能パソコンがそれに応えた。ユーザーのためらいの殻はやぶられ、またたくまにパソコンの環境はWIND（ウィンド）OWS（ウズ）の波に呑み込まれていった。

「一太郎」や「1－2－3」などの主立ったソフトは相次いでWINDOWS版のソフトを投入してくる。マック版から移植された「EXCEL（エクセル）」の評判もいい。右も左もWINDOWS一色だ。

そんな周囲のにぎわいに、当方の対応は内実、大わらわであった。回りは次々にWINDOWS派に転向、いつまでもDOSオンリーというわけにもいかなくなってきた。意外にも、DOSに深入りしていた分だけ、その癖が抜けきれないというジレンマも味わった。

この大きなうねりの余波が、私にとってひとつの転換の契機となるとは、そのときはまだ気づかなかった。

（大安寺住職）

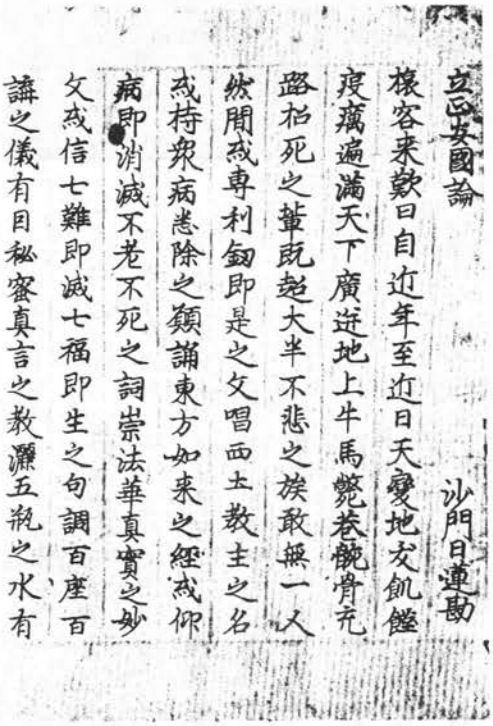
「弟子分帳」と十七回忌〔十七〕

松田銘道

八、「立正安国論」と門弟の書写（続き）

「立正安国論」の書写本が現存するのは、本弟子の中では日興上人と、他に③の日向師の広本形式のものが伝存するだけです。

③の書写年次については『身延秘宝展』の中に収められている写真一葉のみが手元にある資料ということもあって不明です。またそれが日向師の筆によるものかどうかも他の資料と対比できず、その筆跡から判断することもできません。しかし、下の写真を見て知れるように非常に丁寧に書写されていることが知れます。


立正安國論　沙門日蓮勘
榱客来歎曰自近年至近日天変地夭飢饉
疫癘遍満天下廣迸地上牛馬斃巷骸骨充
路招死之輩既超大半不悲之族敢無一人
然間或専利劒即是之文唱西土教主之名
或持衆病悉除之顔誦東方如来之經或仰
病即消滅不老不死之詞崇法華真實之妙
文或信七難即滅七福即生之句調百座百
講之儀有目秘密真言之教灑五瓶之水有

日朗書写「立正安国論」（広本）

冒頭の「沙門日蓮勘」との自署形式から広本の書写本であることが知れます。そしてそのことが書写年次を推測する手がかりともなってきます。広本は弘安元年頃の著述であり、日向師がそれ以後に書写したのは間違いありません。それも御入滅後の可能性が非常に高いと思われます。というのも、五人の本弟子方は大聖人の御在世中に「立正安国論」を書写した可能性はほとんど無いことが、伝存する「申状」から推測できます。

本弟子方の「申状」の特徴などは次項にて検討を加えますが、五人の本弟子方で「申状」とともに「立正安国論」を副進したのは、鎌倉での法難―弘安七・八年頃と推測できる―もピークが過ぎたと思われる正応四年―滅後十年―の日頂師において始めて見られるものであり、それより以前の日昭師や日朗師の「申状」には副進されていません。

「立正安国論」が伝存する日向師は、「申状」とともに「立正安国論」を副進してはいるものの、日頂師の「申状」よりさらに四十年経過していて、滅後間もない

頃の状況を伝えるものではありません。

また日持師には「申状」そのものが伝存していません。本弟子五人方に伝存する「申状」がこのように数少ないものの、そこに見られる「立正安国論」の副進の状況から判断して、おそらく日頂師が副進するようになった正応四年以降とそれ以前とでは、「立正安国論」をめぐる社会的情勢に何か変化があり、それの影響を受けた対応のあらわれではないかと思われます。この社会的情勢については別項にて考察することに致します。

伝存する本弟子方の「申状」から推して、日向師が広本を書写したのは御入滅後で、それも日向師の「申状」と同時期―嘉歴四年―ぐらいまで時代が下がる可能性が高いと思われます。

日向師の広本の書写が御入滅後となると、御在世中に書写されたのは日興上人だけとなります。そしてこのことがまた、御入滅後における日興上人と他の本弟子方との「申状」の特徴の違いともなってあらわれています。それだけに日興上人が御在世中に「立正安国論」を書写されていたことは、興味ある出来事といえます。

④の中山日高師の書写本は略本であることは知れますが、書写年次は記されていません。

書写年次が正安四年（一三〇二）三月とされるのは、伝存する日高師の「申状」によります。すなわち中尾堯氏は「申状」と「立正安国論」の筆跡の特徴に注目して次のように書写年次を推測しています。

「中山法華経寺には第二代の日高が書写した『立正安国論』の写本がある。これは書写の年紀などは全く記されていないが、中山法華経寺文書所収の正安四年三月日付『日高申状』によると次のように記されている。

日蓮聖人遺弟日高註申……

別進　壹巻　立正安国論

日高は、この申状を浄書する時に、『立正安国論』もともに書写したらしく、その筆跡や筆勢がまことによく一致している」（古文書研究二六号所収「日蓮筆『立正安国論』（国宝）とその紙背『本朝文粋』巻十三の成立と伝来をめぐる研究」）

天台沙門日蓮撰之
旅客来旦自近年至于日天変地夭飢饉
疫癘遍満天下廣迄地上牛馬路頭骸骨充
路招死之輩既越大半不悲之族敢無一人
然間或専利剣即是之文唱西土教主之名
或恃衆病悉除之願誦東方如来之経或仰
病即消滅不老不死之調案法華真実之妙
文或信七難即滅七福即生之句調百座百

日高書写「立正安国論」（略本）

致しません。本弟子五人方に伝存する「申状」がこのように数少ないものの、そこに見られる「立正安国論」の副進の状況から判断して、おそらく日頂師が副進するようになった正応四年以降とそれ以前とでは、「立正安国論」をめぐる社会的情勢に何か変化があり、それの影響を受けた対応のあらわれではないかと思われます。この社会的情勢については別項にて考察することに致します。

伝存する本弟子方の「申状」から推して、日向師が広本を書写したのは御入滅後で、それも日向師の「申状」と同時期―嘉歴四年―ぐらいまで時代が下がる可能性が高いと思われます。

日向師の広本の書写が御入滅後となると、御在世中に書写されたのは日興上人だけとなります。そしてこのことがまた、御入滅後における日興上人と他の本弟子方との「申状」の特徴の違いともなってあらわれています。それだけに日興上人が御在世中に「立正安国論」を書写されていたことは、興味ある出来事といえます。

④の中山日高師の書写本は略本であることは知れますが、書写年次は記されていません。

書写年次が正安四年（一三〇二）三月とされるのは、伝存する日高師の「申状」によります。すなわち中尾堯氏は「申状」と「立正安国論」の筆跡の特徴に注目して次のように書写年次を推測しています。

「中山法華経寺には第二代の日高が書写した『立正安国論』の写本がある。これは書写の年紀などは全く記されていないが、中山法華経寺文書所収の正安四年三月日付『日高申状』によると次のように記されている。

日蓮聖人遺弟日高註申……

別進　壹巻　立正安国論

日高は、この申状を浄書する時に、『立正安国論』もともに書写したらしく、その筆跡や筆勢がまことによく一致している」（古文書研究二六号所収「日蓮筆『立正安国論』（国宝）とその紙背『本朝文粋』巻十三の成立と伝来をめぐる研究」）

筆跡の特徴から年月日を推定することは、大聖人の書状でも数多く行われています。しかしそれは推定者によって年月が大きく違うこともしばしばあり、必ずしも決定的な判断とはいえませんが、日高師の場合は「申状」と「立正安国論」の両書が伝存していることから、それに筆跡の特徴が加味されるとなれば、「立正安国論」が「申状」とともに書写された可能性はかなり高いのではないかと思

われます。

二、「立正安国論」と「申状」

日興上人の「弟子分帳」には、六十六名の弟子檀越が大聖人の御本尊を授与―ただし日乗師には日興上人の御本尊―されたことが記されていますが、その二割弱にあたる十二名が、永仁六年の時点で日興上人の教えに背いています。

十二名の内訳は、弟子が八名、檀越が四名です。弟子では本弟子六人の一人である日持師、それに熱原法難で中心的な役割を果たした日弁師など、日興上人の弟子が四名も含まれています。残りは日持師の弟子二名と日弁師、寂日坊の弟子がそれぞれ一名です。また、檀越では尼も二名まれています。こうしたことは、大聖人が御入滅された後、多くの弟子檀越が信仰の変節を強いられる何かが生じたことを物語っています。

そしてそれは内部から生じた問題でなく、外部から問題が生じていたであろうことも想像できるのであります。すなわち日興上人は「弟子分帳」にて、本弟子の一人であった日持師に対し、本弟子五人と一同して「天台門徒」と名乗ったことをわざわざ記され批判されていますが、このことは大聖人の弟子と名乗ることが不都合となるような出来事―それはおそらく幕府からの弾圧で、しかも蒙古襲来と関連しての祈祷要請などが関連していたのではないか―が生じたことに起因しています。

また日持師のみならずその弟子二名が日興上人の門下から離れていったことは、五人の本弟子のみならず、それぞれの門下の弟子檀越にもやはり信仰の変節が生じた可能性を示しており、門下全体に与えた影響はかなり大きいものがあったと知れます。

弾圧の全容について述べた確実な資料は「弟子分帳」の記述のみです。

日興上人は「住坊を破却されんと欲すの刻」に、五人の本弟子方が「天台宗を行じて御祈祷」を行なう旨の「申状」を捧げることによって、「破却の難」を免れたことが、五人の本弟子方の申状に明らかであると、指摘されています。

この「弟子分帳」の記述からは、住坊が具体的にどのような被害を受けたのかもう一つはっきりしません。しかし池田令道師―『聖道』一〇〇号参照―も指摘しているように、「破却されんと欲すの刻」という表記からすると、布教の拠点となる道場の破却を未然に防ぐ方策として「大聖人の弟子」から「天台の弟子」へと名乗りを変え、また国家安穏等の祈祷を先だって受け入れた可能性が高いと思います。つまり、住坊破却という被害が現実に生じる前に、破却の難を逃れる方策を講じ、難を免れていたのではないかと思われます。

その住坊破却の難がいつ頃生じたのかについては、「具に彼の状に見えたり」と述べられた五人の本弟子方の「申状」を検討することによって推測できそうです。

まず次頁に、本弟子六人の申状を年号順に図示して紹介し、順次検討を加えてみます。

以上図示した中で、⑧の日弁師と⑩の中山日高師を除いた十五本が本弟子方の申状です。

①は日昭師のものです。「天台沙門」

申状一覧

	著作年月日	滅後	著者	伝存	安国論	名乗り	出典
①	弘安八年卯月	四	日昭師	有	無	天台沙門	『宗全』一－十七
②	弘安八年	四	日朗師	有	無	天台沙門	『宗全』一－二一
③	弘安八年	四	日興上人	無	不明	不明	日我師「申状見聞」
④	正応二年正月	八	日興上人	有	有	日蓮聖人弟子	『興全』三一八
⑤	正応三年	九	日興上人	無	不明	不明	日我師「申状見聞」
⑥	正応四年三月	十	日頂師	有	有	天台法華宗沙門	『宗全』一－四〇
⑦	不明		日頂・日向師	無	不明	天台沙門	「御伝土代」
⑧	永仁元年五月一六日	十二	日弁師	有	有	日蓮聖人弟子	『宗全』一－八八
⑨	正安元年	十八	日興上人	無	不明	不明	『富要』八－三三四
⑩	正安四年	二一	日高師	有	有	日蓮聖人遺弟	『宗全』一－四七
⑪	徳治三年九月	二七	日興上人	有	有	日蓮聖人弟子	『静岡県史』
⑫	正和二年七月	三二	日興上人	無	不明	不明	『宗全』二－一〇〇
⑬	嘉歴二年八月	四六	日興上人	有	有	日蓮聖人弟子	『興全』三二一
⑭	嘉歴二年十一月一七日	四六	日興上人	無	不明	不明	日我師「申状見聞」
⑮	嘉歴三年十一月十七日	四七	日興上人	無	不明	不明	日我師「申状見聞」
⑯	嘉歴四年正月二九日	四八	日向師	有	有	日蓮聖人遺弟	『宗全』一－三六
⑰	元徳二年三月	四九	日興上人	有	有	日蓮聖人弟子	『興全』三二三

と名乗り、「立正安国論」の副進もされていません。

②は日朗師のものです。①とまったく同じ特徴が見られます。

③は⑤⑭⑮と同じく保田日我師の「申状見聞」（『富要』四－一一三、一一五頁）に、日興上人の申状が存在したことを記述していますが、すべて伝存せず名乗り等は不明です。また⑭と⑮は同月同日であることから、嘉歴二年か三年はどちらかが伝写の誤りであるか、誤植の可能性があるのかも知れません。

④は日興上人のものです。「日蓮聖人弟子」との名乗りや「立正安国論」の副進は、①②の日昭師などとは好対照をなしています。また冒頭には「日興重申」と、再び申し上げると述べられていて、本状以前に申状を上呈されていたことが窺えます。それが①②と同じ時期のものとすれば、③の申状であると推測することもできますし、また⑤⑭⑮も伝存していた可能性が出てきます。

⑥は日頂師のものです。名乗りは「天台法華宗沙門」とあり、①②と同じく天台の名乗りながら、④の日興上人と同じく「立正安国論」を副進しているとの特徴がみられます。しかし④で注記された「文応元年勘之」の記述は見られません。これは⑯の日向師のものも同じです。

⑦は「日頂・日向師一紙」と称される申状です。日道上人の「御伝土代」に引用されていますが伝存はしていません。名乗りについては「天台沙門日向・日頂」とあって、日向・日頂師が連名で提出していたことが知れます。

「御伝土代」では日朗師と日昭師の①②のものとともに天台沙門等の名乗りを非難されていることから、年月日は不明ながらも、①②とほぼ同じ時期のものと見ることも可能です。そして、日向・日

頂師が一緒に行動した時期があったことは、その後の日頂・日向師の変遷と照らして興味ある出来事といえます。

また日向師には⑯が伝存するものの、名乗りや教義の主張等に⑦とは大きな変遷が見られます。

⑨は日興上人のものですが、⑪⑫⑰と関連があります。⑰を所収している『宗全』は、撰述年「元徳二年三月日」について、

「元徳等七字、一本作正和二年七月、続集作正安元年九月日、今依諫国書」

（宗全二―一〇〇頁）

と注記していて、撰述年に元徳・正和・正安・徳治の四説があるとしています。

また⑪を所収している『静岡県史』は、「西山本門寺由緒書」本を出典としていますが、撰述年が異なるだけで、内容は⑰の『興全』と『宗全』所収本ともまったく同じです。

さらに⑰の『興全』では「元徳二年三月日」について、

「『甲州古文書（三・二一）』にも、ほぼ本文と同似の文で『徳治三年九月』の識語をもつ『日興上人言上書写（一）』（山梨常在寺文書）の掲載をみる」（三二四頁）

と注記していて、⑪と撰述年も内容も全て同じものが甲州古文書に所収されていることを紹介しています。

このことは『興全』でも推測しているように、おそらく同文の申状を何回か使用されたことを示す事例であろうと思われます。

さらに、これより日興上人は「三時弘教次第」も副進されるようになっていますが、これは伝教大師の法華が迹門であり、大聖人の法華が本門であるとの申状での主張をより明確にするために図示したものです。

⑬は日興上人のものです。④と同じく「日蓮聖人弟子」との名乗りと「立正安国論」が副進されています。

⑯は日向師のものです。日向師は⑦で「天台沙門」との名乗りをしていましが、ここでは「日蓮聖人遺弟」と変わってきています。また「立正安国論」も副進していて、五人の本弟子方ではじめて日興上人の形式と非常に似た主張をするようになってきています。

以上、本弟子方の申状の形式を中心に簡略にその特徴を検討してきましたが、それでも名乗りについて、

a、天台沙門

b、日蓮聖人弟子

との違いが見られ、また「立正安国論」の副進についても、

c、有

d、無

があって、日興上人以外の本弟子方にはその対応に様々な変化が生じていることが窺い知れます。

まづ、①②の弘安八年ではaとdとの形式であったものが、それより六年後の⑥ではaとcへと変化し、さらにそれより四十年後の⑯ではbとcとなって、④以降の日興上人の形式―bとc―を踏襲するまでに変化してきています。

この変化の原因をさらに日興上人と五人の本弟子方との申状における主張の特徴などを加味して、次項にて探ってみたいと思います。（つづく・正覚院主管）

天地つかの間〔その二十一〕

成田詳道

どんな理由なのだろうか。岡山の古老の話で、瀬戸内海に強い風が吹くと、百キロメートルも離れた、山間の津山地方でも、同時に大風の吹き荒れる現象があり、地元ではこれを「ヒロト風」と呼ぶ、と聞く。

高い山から吹き下ろす風を、山背の風といい、関西では六甲山からのそれを、六甲おろしといって、阪神タイガースの応援歌でも、よく知られる。

いづこも風の流れが、生活に大きな影響をあたえる。六甲おろしは甲子園球場の試合展開を左右し、ときに珍現象をも巻きおこす。

梅田から阪急電車に乗り、池田駅に降りた人が、大阪の寒さにくらべて、もう一つ厳しい、とよく言う。隣りの豊中市から来ても、そう思うのだから、まちがいない。

落語に「池田の猪買い」というネタがある。大阪から生きた猪を、目の前で撃ってもらおうと、雪深い池田を訪ねる話で、昔から池田は寒かったようだ。五月山からの山背風が、猪名川の川風をともない、池田の冷たさが、一段と増すのだろう。

風といえば、源立寺の駐車場は、以前から格好の風の通り道であり、前の国道から阪急テニスコートへ向って、威風堂々と吹き抜けていた。

阪神高速の延長工事で池田の風は変わるか（工事中の橋脚）

よって駐車場奥の植え込みは、いつもコンビニのビニール袋と、阪神や園田競馬のはずれ磁気馬券、空き缶一杯ほどのたばこの吸い殻、車の給油領収書などの、吹き溜まりとなっていた。

ところが近頃、気づいたことに修復工事以来、風の流れが変わった。脇玄関をかねて増設されたトイレが、駐車場の奥をふさぐ格好となり、風の通り道をさまたげたからである。

脇玄関は風を、真正面から受ける位置にあり、戸を開けたとたんに、人と一緒にあらゆるゴミが、玄関からトイレへコンニチワと、なりはしないかと危惧もした。

あにはからんや。風は人智をあざ笑い、脇玄関を横目に、塀と三師塔の間に流れ込み、そこで渦まき居座る行儀にとでた。

そこで言い訳を一つ。みなさんがお寺に参詣し、先づ三師塔に、題目三唱をされる時、もし仮りに、そこに馬券や木の葉が、渦まいていたとしても、それは私が掃除を怠けたとは、夢おもいませぬように。それはきっと風の悪戯なのだから。

思えば、なんとか日興上人の風を興したいと願って、有縁の僧俗のご支援と後押しで、興風談所が発足し、今では各地に若手同志も増えてきた。

また出版物などから、宗門外には一服の涼風と、容認された事実もある。しかし肝心かなめの富士上方の地方には、なかなか吹き荒れたとの話が、伝わって来ない。

おおかた、臆病風が居座っているか、風をくらって逃げ出したのだろうが、富士山に興風が席巻するほどの、努力と精進が求められているのだろう。（源立寺執事）

法華講入講式後にご住職を囲んで記念撮影

恵日だより

法華講入講式

四月六日（日）午前十時

ことしは桜の開花時期が、例年より早いだろうと、心弾む気象庁の予報だったが、それは梅雨入りを思わせるような、長雨と二人三脚でやってきた。もうそろそろ、青い空と太陽が恋しく感じるこの日の朝も、重たげな灰黒色の空の下で、山門の鬼瓦は雨に泣き濡れていた。

しかし、早くから参詣する新入講者の顔色は、誰も天候に反比例し、輝いて見えた。迎える源立寺も、修復工事が完了し、また信心為本の日常がよみがえり、今年は十二世帯の入講者が参集した。

さらに役員改選で任期が満了し、新しい地区役員の参列するなか、尾林講頭、橋本副講頭のあいさつに続き、新入講者を代表して、摂津市在住の岩本敏夫さんが、力強いあいさつを行い（一九頁別掲）、源立寺法華講の新年度の旅立ちに、輝かしい花をそえた。

会計の太田幹事からは、法華講費を郵便局の自動振替にて、支払う説明が懇切丁寧になされ、題目三唱の後、記念撮影にて、入講式は終了した。

終了後、本堂の彼方此方で、地区別に歓迎の懇談が開かれた。

「法華講入講式挨拶」

よき檀那をめざして

高槻地区　岩本敏夫

あいさつする岩本さん

ただ今、ご紹介いただきました、岩本敏夫と申します。

この信心は、一眼の亀が大海に漂（ただよ）う梅檀の浮木の穴にめぐり会う、との譬えがありますように、めぐり会うことが大変難しい信心であると思います。毎日同じように南無妙法蓮華経とお題目を唱えていましても、また、日蓮正宗と言われましても、正しい日興門流にめぐり会うことは大変な仏縁であると思います。

その点、本日の入講式は、まさに我われがその偉大な仏法に縁することができたこと、また正師にめぐり会うことができたこと、を意味しているものと思うのであります。

一生成仏を願う我われには、大願成就を叶えるための三つの基本があります。一つには良き師、二つには良き法、三つには良き檀那といわれています。

私たちは、長い間いろいろと頭を打ちながら正法を求めてまいりましたが、本日源立寺に入講させていただきましたので、良き師・良き法にはめぐり会うことができましたが、もう一つの良き檀那とは、我われ信仰者が権威や権力に屈することなく、正法正師を正しく守っていくことが信仰者の本意であると思い、本日よりはご住職を始め、先輩方々とともに精進して、信心を貫いて参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

本日は、誠にありがとうございました。これをもちまして、お礼の言葉とさせていただきます。

新入講者紹介

地区	氏名	
高槻	岩本敏夫	（摂津市）
同	岩本正夫	（寝屋川市）
同	岩本邦夫	（高槻市）
同	吉田輝子	（枚方市）
同	片岡頼子	（高槻市）
同	細川美恵	（吹田市）
箕面	福田富士子	（箕面市）
同	田上禮次郎	（箕面市）
服部	角田市子	（豊中市）
同	八乙女孝一	（淀川区）
大阪	笹川みよ	（淀川区）
旭丘	金津美枝子	（八幡市）

この度、右の方々が新しく入講されました。おめでとうございます。

投稿歓迎！

『恵日』編集室では、読者の皆さまからの投稿を、広く募集しております。

信仰所感、研究発表、随筆、ニュース、写真、詩歌、俳句、その他等々。

〆切は、毎月十五日です。

源立寺内『恵日』編集室までお送り下さい。

修復委員会・総代会

四月六日（日）午後四時

源立寺の修復工事もすべて終わり、最終的な事務処理となる、収支決算の報告と確認を行うべく、六日の夕方四時より客間において、源立寺修復委員会が開かれた。

最初に責任役員会（総代会）が開かれ、引き続き、修復委員会のメンバーが加わり、修復工事の経過説明と、決算報告（下記表参照）があり、全員これを認証した。

その後、ご住職及び尾林修復委員長から修復完了の謝辞があり、収支決算の書類に、全委員の押捺が済まされ、すべての修復事業が、実質この日で完了した。

この後、全員で読経唱題をして、御宝前に奉告申し上げ、記念撮影をすると、ささやかな慰労の会が開かれ、本日をもって源立寺修復委員会は解散となった。

《 源立寺修復事業特別会計 》

【収入の部】

源立寺拠出分	１０、０００、０００円
源立寺法華講拠出分	５、６００、０００円
僧侶見舞金等（29件）	２、０８０、０００円
他寺講中寺族見舞金等（15件）	７７０、０００円
源立寺檀信徒特別御供養（424件）	５８、２７３、８６６円
正信会義援金	７、１００、０００円
利息	２２７、３９７円
源立寺法華講追加拠出分	２、０００、０００円
源立寺追加拠出分	１２、６６６、６０１円
（総計）	９８、７１７、８６４円

【支出の部】

本堂・庫裏修繕費	６９、４８７、８５０円
山門・トイレ・塀修繕費	２３、０４９、７０５円
本堂空調・照明等器具費	３、６４９、１３８円
三師塔・駐車場等雑工事	２、０５９、０５４円
事務費	４７２、１１７円
（総計）	９８、７１７、８６４円

上記の通り相違ありません

平成９年３月３１日

源立寺修復委員会

【訃　報】

〔池田市〕

実相院妙春信女　四月四日寂

俗名石井ヨネ子之霊　行年七十四歳

謹んでご冥福をお祈りします

各種行事のご案内

◎法華講全国大会

全国大会の参加者は定員になりましたので、申し込みは締め切りました。

集合　五月二十五日（日）八時十五分
場所　源立寺

なお、参加費は、五月の御講の時に納入して下さい。

◎源立寺法華講総会

六月八日（日）午後一時から、第二十七回源立寺法華講総会が開催されます。講員の皆さんには、ふるってご参加下さい。

◎婦人部総会

七月二十日（日）午前十時より、婦人部総会が開かれます。婦人部のみな様には、多数お集まり下さい。当日は、槻木地区の奥ハツ先生がお話をされます。

一泊研修会参加者募集のお知らせ

今年の研修会は、講義や研鑽発表を中心とせず、家族単位の懇親を目的として、九月の第一土、日曜日に開催します。皆さんふるってご参加ください。

日時　平成九年九月六・七日（土・日）
場所　神戸市北区「しあわせ村」
（中国自動車道西宮北インターから三十五分）
費用　一三〇〇〇円（一泊二日、交通費込み）
人員　五十四名

【皐月詠草】

〔橋本　圓子〕
苗代の　早苗を本田に　植え替うる
如くに孫は　嫁ぎ行きたり

〔橋本　義一〕
中学・高校と　睦みし愛の　ゴールイン
祖父母は祈る　末永き幸

〔坂本　フミ子〕
瀬見峡に　積もれる雪の　露天風呂
頭寒足熱　この世の浄土

濁る世に　さおりの童謡　コンサート
幼にかえり　心洗わる

開け放つ　窓に初夏の　風薫り
朝の勤行　爽やかとなる

ひさびさに　逢えば要用　捨ておきて
語り合いいる　われらの姉妹

【恵日俳壇】

〔宮下　留代〕
春の宵　ほろよい機嫌の　赤のれん
飛来する　つばめの姿　待ちかねる

五月の行事

一日（木）　午後二時　お経日

四日（日）　午前八時　講中勤行会・幹事会

七日（月）　午後二時　広基寺お講

十一日（日）　午後一時　お講・合同役員会

十三日（火）　午後一時　お講

二十五日（日）　午後一時　法華講全国大会

※今月の法華経講義はありません

※五月一日の継命新聞の発送は、『宝塚・川西』が担当地区です。

今月のモお講

十日（土）　午後七時　庄内地区（小山定弘宅）

十七日（土）　午後一時半　緑丘地区（児玉融一宅）

二十二日（木）　午後一時半　宝塚地区（伊藤妙子宅）

二十九日（木）　午後一時半　旭丘地区（上田陽子宅）

三十一日（土）　午後一時半　高槻地区（橋本義一宅）

恵日

平成九年五月号　通巻二十七号
平成九年五月一日発行

編集兼発行人　菅野憲道
発行　恵日編集室

〒五六三　池田市槻木町一－一〇　源立寺内
TEL（〇七二七）五一－三一三五
E-Mail：genn@wombat.or.jp
BBS：PXH05170（NIFTY）　BMC92733（PCVAN）

恵日　五月号　通巻二七号　平成九年五月一日発行（毎月一回一日発行）　編集兼発行人　菅野憲道　発行所　〒五六三　池田市槻木町一－一〇　源立寺内　恵日編集室　定価一〇〇円